科学と人のアートによって醸成される、一人ひとりの自律に基づく死生観に裏打ちされた超高齢社会

Science and Humanity for Fostering a Super–aged Society
that Respects Individual's Views on Life and Death and Their Autonomy

研究代表者 山川みやえ（医学系研究科 准教授）

研究協力者
〔学内〕土岐博（核物理研究センター 名誉教授） 鈴木径一郎（社会技術共創研究センター 特任助教） 木多道宏（工学研究科 教授）
杉田美和（工学研究科 特任准教授） 佐藤眞一（人間科学研究科 名誉教授） 深田悠花（医学研究科保健学専攻 博士後期課程）
〔学外〕鎌田大啓（株式会社TRAPE） 河上崇陽（株式会社グルメ杵屋） 宮崎宏興（NPO法人いねいぶる） 福村雄一（司法書士法人福村事務所）
瀧澤一賀（一般社団法人シニアライフ協会） 瀬戸ひろえ（京都女子大学） 熊田梨恵（特定非営利活動法人パブリックプレス） 山田暁（アインスタインエステート株式会社）
歌丸和見（一般社団法人認知症予防活動コンソーシアム）

共同研究機関・連携機関
吹田市（福祉部・健康医療部） 豊中市（福祉部） 箕面市社会福祉協議会 社会福祉法人大阪府社会福祉事業団 東大阪プロジェクト 公益財団法人浅香山病院
NTT PARAVITA 日本電気株式会社（NEC Corporation） パナソニック株式会社 Amame Associate Japan株式会社

1.プロジェクト概要

本プロジェクトは2年間の延長が認められ、2025年度は次の展開に向けた基盤形成の年となりました。地域共生、個の尊厳、ケアと暮らしの再編を共通軸に、自治会、図書館、介護、医療、哲学対話、DV支援、防災、デジタル活用などの実践が各地で積み重ねられてきました。

年度末のフォーラムは、これらの実践を点在した活動として終わらせるのではなく、日常と有事を分断せず、善意や個人の努力に依存しすぎない支え合いを、地域の仕組みとしてどう位置づけるかを整理・共有する場として開催しました。

2. 2025年度の取り組み

❶地域共生を促す自治会活動（土岐博）

自治会加入率の低下が全国的な課題となる中、今年度は「義務的から自主的へ」を基本理念として「自治会クラスター構想」を提案しました。本構想では、自治会を生活の基盤となる最小単位の「自治会ユニット」と、複数自治会が連携する自主的な活動単位「クラスター」に再編します。義務的な活動を減らし、子ども食堂や哲学カフェなど関心に基づく参加を促すことで、全員参加型の自治会への転換を目指しています。

❷個の尊厳を高める環境づくりから終末期までの包括的ケア（杉田美和）

日本モンテッソーリケア協会、大阪大学、NECによる共同研究の成果を、2025年7月8日から14日に大阪・関西万博フューチャーライフヴィレッジで出展しました。認知症高齢者の個性や強み、感性を生かし、コミュニティの中で自律を促す介護手法「モンテッソーリケア」とデジタルツイン技術を紹介しました。
（https://www.mocajapan.com/happy-dementia）。

❸介護の生産性向上の人材育成（鎌田大啓）

メンバーの鎌田氏が率いるTRAPEは、2017年より厚生労働省と協働し、介護事業所の変革力を引き出す取組を進めていて、無料のオンラインサービス「生産性向上くん®」で業務改善（DX）とケアのアップデートを支援しています。そのプロセスでは、経験学習を通じたチーム形成やリーダー育成を促進し、全国で自律的に変革を実行し新たな価値を創造できるDX人材やウェルビーイング人材の創出につなげています。

❹地域コミュニティの活性化（木多道宏）

「いのち宣言」に、大学キャンパスや地域施設を活用することで広域の被災者を受容し、被災者をまちぐるみで支援する利他の心を中心に置いた社会の構築を宣言しました。その一環として、連携企業や自治体とともに共感流動（Empathy Flow）に基づく尊厳ある移転に必要なUrban Void（潜在的な空間資源）の可視化に着手しました。

超高齢化社会のチャレンジングな変化の中で一人ひとりの人生を豊かにするために

❺公共図書館での地域共生（山川みやえ・河上崇陽）

図書館を拠点に、超高齢社会における学びと交流をひらく実践に取り組みました。9月には堺市立中央図書館で音読教室「読む・詠む・語る」を開催し、詩やわらべうたを声に出して読む体験を通して、口腔機能への気づきと参加者同士の交流を促しました。2月にはコンパニオンロボットをテーマに、公共空間としての図書館の役割と可能性について考えるイベントを開催しました。

❻DV女性支援における市民主体のトラウマケア実践（熊田梨恵）

DVやトラウマを経験した女性を対象に、市民主体の自助グループを対面（月1回）・オンライン（月2回）で継続的に運営しています。トラウマケア書籍の読み合わせやアートワークを通じた回復支援を行いました。本年度は池田市と連携し、女性向けトラウマケア講座の講師を担当しました。あわせて、国際NGOキャパシターによるボディーワークを一般市民向けに開催し、日常に根ざした心身ケアの普及に取り組みました。

❼医療介護の連携と地域ネットワークづくり（福村雄一）

この一年も京都信用金庫において終活講座を定期的に開催し、5店舗で延べ7回実施しました。あわせて、エリア内5店舗による合同開催にも取り組み、信用金庫全体の取り組みとして展開する基盤が整いつつあります。店舗間の連携を通じて、地域住民が終活について日常的に語り合える雰囲気づくりも進みました。

❽死生観の醸成（深田悠花・小俣ひふみ・瀧澤一賀）

豊中市との共催により、勇美記念財団の助成を受け、地域住民を対象とした人生会議（アドバンス・ケア・プランニング／ACP）講座を実施しました。本講座では基礎知識に加え、訪問看護の立場から在宅医療の紹介、さらに自律プロジェクトの杉田氏をゲスト講師に迎え、看護ホスピスの実例を通じて「自分ごと」として考える機会を提供しました。

❾哲学対話（鈴木径一郎）

豊中市、箕面市、伊丹市で地域住民が主体となる哲学カフェが継続しています。さらに、豊中市立庄内さくら学園での授業「てつがくのじかん」は、反響を受けて今年度から5年生だけでなく9年生（中学3年生）にも拡大し、地域の多世代が哲学対話をしています。

❿高齢者デジタルデバイドへの取り組み（宮崎宏興）

たつの市の「ご近所デジタルマイスター」が各地でスマホ相談会を実施しました。商業施設や自治会などシニアの生活動線に沿った開催を進め、SNSを活用した見守りの仕組みが広がりました。たつの市ご近所デジタルマイスター養成講座（全4回）を開講し、修了者は、市長より修了証等の交付を受けたのち、今後の活動に向けた展開計画を話し合い、スマホ相談の更なる拠点が広がりました。

⓫地域資源を活かした共生の居場所づくり（歌丸和見・瀧澤一賀）

「ミニらいとモルック」を活用し、多世代が自然に集う居場所「モルパ」作りにモデル事業として挑戦しました。豊中市千里での実践を通じて、スポーツが世代を超えた交流と健康増進を促す有効なデータを得ることができました。

⓬誰もが笑顔でいられる社会づくり（山田暁）

今年度を「誰もが笑顔でいられる社会づくり元年」とし、二つのモデル事業に取り組みました。街を実証フィールドとした車いす体験型ワークでは、自分事としての気づきを重視するために、駅や公共空間を体験し、日常に潜むバリアや課題を可視化しました。さらに、不動産管理会社をハブとした見守りモデルを構築し、高齢者特約や市民後見人制度を活用した持続的な仕組みづくりを進めました。

3.本プロジェクトのこれから

今後は、各メンバーによる自律的な活動を基盤とし、分野や地域を越えた連携をさらに深めていきます。自治会、図書館、ケア、医療、哲学対話、デジタル支援、防災、DV支援などの実践をつなぎ、共通課題の解決に協働して取り組みます。各現場で蓄積された実践知を共有・可視化し、地域モデルとして整理・体系化することで、共生社会の実装につなげていきます。